

令和6年4月2日の毎日新聞朝刊に記載されました、本教里親についての記事（参考資料）と、それに対する天理教の見解に基づく通達。

「布教しないと不幸になる」

13歳の時、天理教の分教会に「里子」として預けられた女性が、毎日新聞の取材に「里親に信仰を強制された」と訴えた。天理教は里親活動に熱心に取り組むことで知られるが、里子に信仰の自由はあるのだろうか。「私は空っぽだった」という女性の声に耳を傾けてみたい。

13歳で天理分教会里子の女性

しおり(35)＝仮名＝は九州の地方都市で生まれた。小学生の頃に両親が離婚し、母と姉、妹との4人暮らしだった。中学1年の時、児童相談所(児相)は母の養育能力がないと判断し、姉妹3人は児童養護施設に預けられた。

「面談してほしい人がいる」。入所後間もなく、施設の職員から言われた。天理教の分教会を営む教会長が、3人を里子として迎えたいという意向だった。姉は中学3年で、妹は小学5年だった。「私

たちは(里子に)行くとか、行かないとか決める権利はなかった。児相や施設と教会長夫婦の間で話が進んだ」としおりは振り返る。

里親は児童福祉法に基づき、さまざまな事情で実親に育てられない子どもを家庭で預かり、養育する制度だ。養子縁組とは異なり、里親と里子に法的な親子関係はない。「いつか引き取りにくるから」。母は3人にそう説明した。しおりは天理教という言葉

葉自体を聞くのが初めてだったが、ちゃんとした所に行けて安心して寝られるから大丈夫かな、と当時は思っていた。しかし、現実とは過酷だった。

教会長夫婦の自宅は分教会を兼ねている。姉妹3人は初日から、自宅にある「神殿」で参拝の手順を教え込まれた。毎朝、午前5時ごろに起こされて「朝づとめ」と呼ばれる礼拝に参加した。拍子木

や太鼓に合わせて歌を唱え、手を振って祈りをささげた。経典を読み、教会長の講話を聞いてから登校。帰宅すると「夕づとめ」があった。

姉妹3人が寝起きたのは物置のような狭い部屋。勉強机もエアコンもなかった。住み込みの男性から食事の準備や片付け、掃除などを厳しくしつけられた。

「おまえたちはいんねん」転機が訪れたのは25歳の時だ。信者の男性に結婚を申し込まれた。その男性は関西にある分教会の、教会長の息子。「どこか別の場所へ行きたい」と思っていたしおりは受け入れた。

転居、離婚、棄教…心の傷なお

だが、嫁ぎ先でも里子としての出自がしおりを苦しめた。「お母さんみたいににならないためにしっかりやってね」。教会の関係者からはそう言われ続けた。

4年ほど家庭生活を送った末に、心が折れた。「やっぱり幸せになれないんだ」。しおりはうつ病を患い、離婚した。逃げるように天理教からも離れた。

10年以上を費やした信仰を失うと、しおりには何も残っていなかった。「私の人生は何だったんだろう」。一時、友人の家に泊めてもらった

が悪い」。教会長はそう話した。天理教では良い行いをすれば良い結果が、悪い行いをすれば悪い結果が表れることを「いんねん」と呼び、来世に受け継がれると教えられる。

「前世の行いや母の育て方が悪かったから、神様のお引き寄せで教会に連れてこられた。幸せになるためには教えを学ばなければいけないよ」

住み込みの男性は教会長の不在時には酒に酔い、暴力を振るったり、体を触ったりすることがあったという。それでもじっと耐えた。「教会の一員にならないと追い出されるんじゃないか。神様に罰を与えられるんじゃないかと怖かった」としおりは言う。

そんな時、SNS(ネット交流サービス)で知り合ったのが今の夫だ。着の身着のまま転がり込むように家に来たしおりを、夫は受け入れてくれた。半年後、2人は結婚した。

夫との出会いは、しおりにとって「奇跡みたい」なことだ。それでも、幼い頃からの信仰の影響や、心の傷が癒えなかったり、夢に昔の記憶が出てきたりして自己嫌悪にさいなまれる。

「私にもっと普通の人生があったなら」としおりは空想する。友達と旅行したり、ショッピングをしたり、恋愛したりしたかったな――。取り

里親は通常、子どもが18歳になるまでが対象だ。しかし、教会長の干渉は続いた。しおりは高校卒業後、天理教本部(奈良県天理市)で教えを学ぶ「専修科」へ行くように言われた。寮に入り、経典を読んだり、おつとめに使う鳴り物(樂器)の練習をしたりして2年間すごした。周囲は他の教会長の息子や娘たちばかりで、里子であるしおりは白い目で見られた。

さらに専門的な課程で2年間すごした後、しおりは関西にある教団施設で布教の実践的な訓練を始めた。街頭で声を張り上げたり、民家の玄関で土下座したりして布教に励んだ。「やりたくないけど、やらなきゃだめなんだ。そうしないと私は絶対、不幸になってしまう」。そんな強迫観念にとりつかれていた。

当時、教会長だった80代の男性は毎日新聞の取材に「おつとめ(礼拝)をする時に一緒にするとか、とは言ったかもしれないが、信仰を強制したことはない。あくまでも『人助け』という教えに基づいて里親をしている」と話した。

一方、362世帯で768人の子どものを養育している「天理教里親連盟」は「子どもには信仰の自由があるので半ば強制になっていないか、里親自身の信仰を押し付けていないか、十分気を配っている。しかし、子どもが本心を言えないでいることもあると思う。子どもの心を聴くことができるよう養育力の向上を目指し研修を重ねている」などと文書で回答した。

天理教で布教活動をしていた当時の写真を前に、里子時代の
苦しみを語るしおり—神奈川県内で3月18日



声上げられる 仕組みが必要

井上寿美・大阪大谷大特任教授
(保育学)の話 里親の自宅で養育を受ける里親委託児(里子)は、宗教の強要などを嫌だと感じても言いづらい。居場所を失ってしまふ不安や、里親に面と向かって言ふ難しさもあるだろう。子どもが

声を上げられる仕組みが必要だ。自分の意思をうまく伝えられない子どもの代わりに公的な第三者が代弁する「アドボカシー」や、同じ境遇の子ども同士で語り合える集まりなど、複数の仕組みを作る必要がある。

天理教と里親活動



天理教の里親活動は、教会や信者家庭が孤児らを預かって育ててきたことに始まる。教祖・中山みきの「一人の子を預かって育ててやる程の大きなすけはない」などの言葉をよりどころとしている。

1948年に施行された児童福祉法で里親が制度化されてからは、信者らが自発的に、または地域の要望を受け取る形で取り組んできた。天理教里親連盟は81年に発足した天理教里親会を母体に、83年に現在の名称へ改称。会員の研修会や里親相談室(里親サロン)を開催するなどし、里親の資質向上を目指して活動している。

■「ブギウギ」視聴率、関東15.9%

3月30日に放送を終了したNHK連続テレビ小説「ブギウギ」(全126回)の期間平均世帯視聴率は関東地区で15.9%、関西地区で14.4%だったことが1日、ビデオリサーチの調査(速報値)で分かった。主人公のモデルになった歌手、俳優の笠置シズ子は香川県出身で、岡山・香川地区は13.6%だった。

天理教里親連盟会員の皆様へ

天理教布教部社会福祉課

課長 橋本 武長

天理教里親連盟

委員長 梅原 啓次

拝啓

皆様方には、教祖 140 年祭に向かう三年千日活動の上に、日々勇んでおつとめのことと存じます。また、日々は子どもの養育の上にご尽力いただいておりますこと、心よりお労い申し上げます。

さて、毎日新聞（4 月 2 日発刊）に掲載された天理教里親による宗教強要問題に関する記事について、皆様方には大変ご心配をおかけいたしていることと存じます。この件につきまして、布教部社会福祉課および天理教里親連盟としての見解をお伝えいたします。

掲載されました記事でご本人（元里子さん）がお話しなされたことに対して、当事者（里親）に天理教里親連盟として話を聞かせていただきました。その里親さんは 20 年前から里親をしていますが、その間、児童相談所から「宗教の強要はしないでください」と言われてきましたので、当然強要したことはなく、児童相談所の数回に及ぶ里子への聞き取りからも強要した事実はありませんでした。その里親さんは、「毎日新聞の取材を受けた時、記者の対応が穏やかで、こちらの思いも理解するような話し方だったので、まさかこのような記事が出るとは思わなかった」と言われていました。

今回の記事においては、毎日新聞の記者からの取材を受けた里親さんが語られたことがほとんど掲載されておらず、偏った内容になっていることは、大変残念に思います。

そのような中、全国のお道の里親さん方におかれましては、地域の方々や関係者の方々からもさまざまなご意見をいただいていることと思います。また、記事を読んで非常に心配されておられることと思います。

長年、お道の里親は、教祖の御教えを拠り所として子どもたちのおたすけの思いで里親活動に励んでまいりました。20 年以上前の時期には、行政側も里子に対して宗教行事の参加については容認していた話も聞きますし、かえって人間性を高めていくと賛同されたという話もあります。

しかし、近年は社会的問題も増え、子どもの権利を守ることが重要視されることから、さまざまな取り決めや申し合わせ事項が増えてきました。「宗教の強要」の問題も、その一つです。そういったこともふまえながら、今後はこれまでに以上に各教区や地域においてもお道の里親同士が連携し、助け合って里親活動をしていくことが望まれていると思います。私たちが「宗教の強要」をしていないと思っても、里子が「宗教の強要」をされたと感じて訴えたならば、それは「宗教の強要」になってしまいかねないというのが昨今の現状です。以前と同じように里子と接していても、一昔前なら何の問題もなかったことが、今の時代にあっては「不適切である」「信仰の自由が守られていない」と指摘されることもあるということをご理解いただいていると思います。信仰家庭で共に生活する中で、この「宗教の強要」問題については、特に気をつけなければならない課題であることは、皆様も感じていることと思います。このような状況の中で、これまでに以上に、児童相談所や里親支援機関など、さまざまな関係機関と一層綿密に連絡を取り合うことも大切であることは言うまでもありません。

お道の里親活動の原点は、里子が「安全・安心・温かい家庭」で生活することによって、「里親さんの家に来てよかった、里父・里母、家族は素晴らしい、温かい、親身になってくれる、心がたすかった」と里子が心から思ってもらえるように、日々の生活を共にすることであります。そして、私たちお道の里親は、陽気ぐらしを目指しておたすけの思いでつとめているということは、皆様方と意思を一つにしているところです。

天理教里親連盟としては、この度の案件を私たちお道の里親が里子一人ひとりへの接し方や対応を今一度見直す機会であり、「宗教の強要」「信仰の自由」を考えていく大切な契機であると捉えて、そのような中、どのようにして陽気ぐらしに向かって歩むことができるのか、今後ともお互いに尚一層の研鑽を深め、継続的に研修会等を開催していきたいと考えています。これまで以上にお道の里親が一手一つに、大きなたすけである里親活動を、教祖にお喜びいただき、ご安心いただけるよう、つとめていきたいと考えております。

何卒、皆様方には、お道の里親活動の上に、尚一層のご理解とご協力をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

敬具